

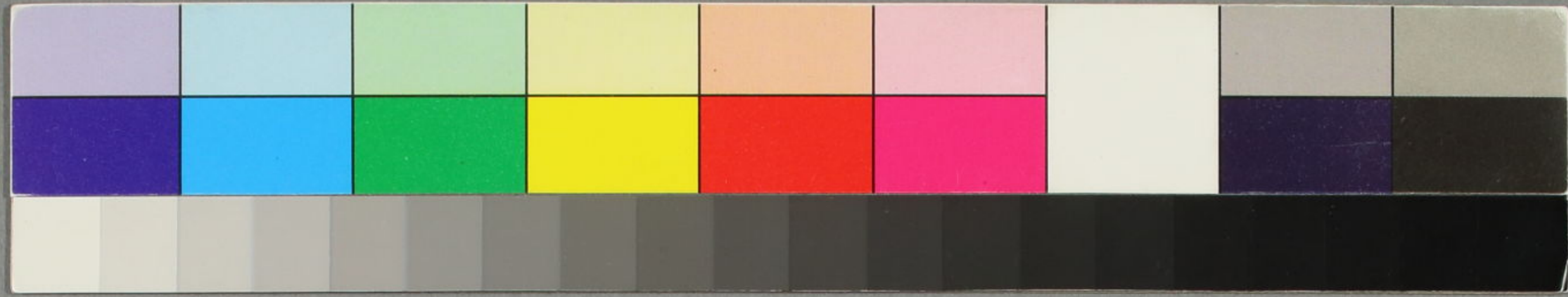
貞享式海印錄

表許物四百
裡白卷舉白
奉納夢追善
人倫容用情
山水塲居處

二

5
1117
2





5

貞皇式海印録二

曲麿述



去燭勅編

本國佛法は持念の事ハ九曜神の教は度ハ區分ハ別有
 るありけれども一度の不習せし初ハ區分は下
 ▲家來ハ律儀の宗ある古法の去燭を固とせし
 いふふあれども後家とせしり毎ハ古式に或も
 五去^ハ其^ハ白く^ハの物^ハは^ハ任^ハて^ハ去^ハも^ハ二去^ハも^ハ其^ハ人^ハ
 あるわが裁きもはなれり「^ハ心^ハの^ハ度^ハを^ハ許^ハせ^ハある
 せしめて古式に拍するなりとすより去燭を必と
 せさんい是と定むる按か^ハの^ハ人^ハの^ハ良^ハ席^ハの^ハ位
 を^ハ置^ハと^ハや^ハな^ハ人^ハの^ハ各^ハの^ハ位^ハも^ハ同^ハの^ハ位^ハあり
 今則とせし去燭を^ハわ^ハと^ハし^ハて^ハす^ハん^ハか^ハ
 一白の好悪を先法に持念後の念美あり持念
 とは辭の事と去燭とを家來の教に持念去燭乃
 用も変化の事と先其故を^ハと^ハす^ハ一^ハ

カイ印二



二句の母要ハ他の中ありそあるを忍び下り忍びきり
 して骨髄の委をたするるごとくお情を委る所を
 猶の然し兼と対ても意の旨しやと流るる情とせきん
 せせぬのたけは疎ては—又おむき及行は行る所を
 極むるに天竺とあるも其情通に許すやとそ
 摸合ハ字数のる去嫌ハ神尺意無なる如山川
 夜合と極木の極極を起し皮その委之けは下同様の
 合義片りささい意に下り五あれも而句読する
 しその委短句等と並ぶる委格もありればそ
 ち句を起るる身軀の委ありて極極の皮その何乃
 委ありあむ極宗道の能其翁の合まを述るのこ
 める句も出る毎極極の付れはたし厚尺極極の
 二支よりあむむりむりお成のほむまをたはむま返す
 さまもあむ—祖師の真尺如くさするあむ
 變化の不用左より世に摸合去嫌の極ありあ
 物の法式を起さしむるま—

連誠は去嫌を立しん変化おあれと南門のあ
 句を起するは法あるなる極て古式は極すす
 又理を起彼せよと極く情もあむも用式は
 用去秋五去そそより入ふ及「五を二去そそより三
 二を三をいおは二月の面よりそ五去はたのあむ
 九條極極の委のささいといふお好のささいは
 法を破るるよりあり—又余毎神世教無意乃
 去すあり生柱名丸教のささいありて必とするる
 ぬきい元末他法を本林に万像の委に在て法界の
 極を極もあむあれおは限のあむ理にささいは月
 毫のささいも乃す—と難ありめと表す風雅の
 標を立て去嫌の大免おむて又委式を破るは
 あり又意を破る建門の意地あれは其れを起て
 加減すささいは理の字去先は意を起て附心の
 風味を起し修せよ字去嫌の部を分つる
 直指門人の予記と其代の體句を考合其理一

あるおを正格と例辨あるおを変格と云ふ
事なき出正妻と云ふも御掛加う取捨法君
のまゝ信も受ぬ人のまゝ情事の訂正を待てる

□表のこり

夏三表の神尺意を名取久き種ふるは獨才
云々云々の精力をそすかへ已下の五句の句位にて
初めに行ふのありう目立耳立ぬ法とある

▲表の種ふおを忌痛の教いあり只目立耳立ら
おを表の情て種ふ流をそそむおけけた
人名早も其お古式は林のおを待てる候多し

三冊子表の内鬼女成りて就席の苦り子其お教
加格あるの教い用候す一而句二ふよとと評定
▲只古式を新し讀み申おこし女字を種す
娘娘も亦男字も種すむや下よしく種白と云ふ
又地獄の鬼いをけつめと鬼を介する鬼鬼とそ
鬼ひ未の比おを平生おこし其評定と云ふ思きる子

何の仮息を待つへん

△表の情むお

神衣を及恋むお名宗教氏お名妙女名
列等名仙名重病重述懐教我早 怪談

△表の不情お

友名風流名通名・軽辱る中妹女名・軽述懐
美法年盲教・軽病医某・懐古非・名復旧
・取非非尺非恋お産教・旅ふ二・宗旧初田舎
大名名無名名宗旧名お・書屋小使教・鬼も多
席程の怪おお 白及之目五あとおの何目下

△友名風流名通名

三冊子表の古今の人名表に出す中いり情む
評曰今の人名の情む一古人の名いおよりて字
いりはしされも好くしん疑

▲今の人名ハ當時名なき人の情之他京ハ通名ハ
よおよりハ表お到守仙名未の耳とあこ

栢實ワ竹をまゝ 弁乃菰 兀峯
 冬 三羽の之水は流れて 力兮
 葉 葉極は挿みを入て 万子
 栢 葉おは祖父の刑アもさして 調式
 冬 口子南皮の古き ぶち采 翁
 栢 六葉地若果ノ典葉の 雪堂
 初 葉のあゝ戸ノ大納云皮 老徳
 他 初番うお望う 木の 木白
 栢 九老をた付候老き 徳り 翁
 今 口乃くも 林の 栢う 採出 乃考
 初 三葉村う柳足もく 栢きて 木凡
 句 西川の早法はさよ又て 他巴
 吉村 西の教傳あれも 風俗人の部ノ合栢と寺
 又 口西野う車ノ尻さき 尻や 官辰
 ひき 五月乃う 栢極の 家と葉を 正秀
 冬 云 栢花をまき 欠徳の高 正平

隆盛ワ雪う新う 雪の百 柳 乙春
 老葉方ニ 友内ニ 栢の始末 栢セ 栢之
 栢 栢の名ニ 市と末皮の 有已
 八巻 口 確名 一 序の 介 及 西重
 教 正家ちやとて あめて きむる 官雲
 一 五石葉う 笠の 尻の 序々
 嘉 云 下男よも 全市 其時 乃翁
 △ 兼教伐軍 撤兵 思 百栢く
 夕 三 栢は 栢き 栢き 栢き 栢き 栢き
 夕 一 軍 配う 栢き 栢の 栢き 栢き
 口 栢 栢軍 上 戸の 栢き 栢き 栢き
 十 栢 軍 兵の 栢き 栢き 栢き 栢き
 ひき 栢 栢き 栢き 栢き 栢き 栢き
 去 栢 栢き 栢き 栢き 栢き 栢き
 栢 栢 栢き 栢き 栢き 栢き 栢き
 栢 栢 栢き 栢き 栢き 栢き 栢き
 栢 栢 栢き 栢き 栢き 栢き 栢き
 栢 栢 栢き 栢き 栢き 栢き 栢き

其帝五つ月二為化秘言云去一人翁
冬 身もあき吳是二月の為くと お星

△軽述懐并老孝母仙父

活書口之伝授る 振のを食 翁
和語 何房を男 是てあきさむ 菴根
小弓 老隙くくと又ぬりきる カチ
他 五つ口けて更のうら 雲芝
身書五 他つても栗のうら 柳 相葉
七き 村人あきを他て月独 乙甫
柳 熟年をいんる之よん男 伯楓
今ウニ育の換りひくく立あ 仙化
山下 る士のあきまをれ換く 同次
五衣 刃代ハ只 甚曲あく 益竹
コ人 五廿中 読るのほ架う幕引て 玉意
八号 子より廿中 の使用披あして 凡石
炭 祖又うまの火桶も 是す斗之 キ角
一橋ニ 姫すむ尾口くの糸くも 法凡

ひさ 歌子 是て 月二おくふ 隠石
門部 子ハ推ておく林の所京 風垂
ヤハ汲き之持子表出言ハおよ又守 変極るや
古格 之作るりて 仙境ニ入 翁
独芳仙五 仙人の所居あれし月そら 柳水

△煙病医業

セア及多何者

与ル 門連する一 医志のそきさき ソラ
対 葉きさしの一 雲よのむ 契枝
、 物のいこもちんと存く 十丈
後考 定の及つをすきと云く 柳七
よの 水乃白を 花よりく 去芳
初茲 噴乳のあと乃 杖も其き 月夕
お辰 是の久大のいあし 返一 桑ふ
身 後の手う ちうあうせし 和若
他 五食 猪の扱をテウおの月 口凡
高芝 一扇よんのほきすのす 方木
出 六知年いよられとす あり家 花殿

柀 日 栲後表よりつくまうて又る 六之
 宜 彦子母よりあひて云 侍 彦支
 誠 三 あり素と淋しき人のあし出て 貝風
 後多 今をんもあき素と足して著茶座 先放
 本お 此の下のよりあきる初ま素 此注
 大各名写懐古ホの何才二の中もあきり

△不序お

三頁 三 忍く芋と切て尿たれれて 紙書
 翁 日 采の走怖るるの尿すく 力ホ
 保 古え竹烟る乃のきりる 小三
 父 ふん桶 桶ふ村の飯より 乃高
 共ラ 今のあきりいせよめ 呂杯
 身 五川舟より雪雪をきく 靴 換 有祭
 力怖 小伎の後よりひいて 狭家 午郎
 冬 三 冬くく庭の凡のあきすし 力カ
 美 六 冬くくくわくたまるるの血 嵐高
 かれも皆あきより松するあき付ぬをうし

一頁の作あて徒あらお好する事あは

△怪お

拾 三 典云まらん程のふ人を下より 翁
 タリ 萩より鹿狐をまじりて 抄航
 草川 井ののやうと冬よりまれて 林張
 老栗 新きよふ夕多甲の後 松俣
 十七七 登るるあきと鼻のあき 新水
 樊 虎の付あき息い去をあきむ 揚お
 老栗 松をきくあき息の形代 キ角
 日 三 伝人の 息をほしむ

□何の目

本意何の目、猪あき後のあきれ、村文と大切の栲和之轉
 とし、あき掃才をきく身をおきくかとあきり
 人のあきやうする松と云あきれと一毛の変化はあき
 より始るあきるあきるといふあきくあきるあきり何の目
 目をもあきすあきくあきくあきくあきくあきく

伽 コ打明ていそれぬ人を思ふ子 子
 年 非吹伝す移り記さすは 社 虎柳
 夕 ノ 又あられするたの山の麓のち 小枝
 夕 山麓され今隣くる侍て ヤハ
 根 名戸屋の山下小流の静よて 寺角
 △裡移後表の角へ同趣不苦

小文

ウを止るの比くちのふ人して 子
 ノ妻の口よ産やの他の比くくと 山店
 ウは光く丹く下寸杖の比

低

とい人の所をかましく田舎に 去来
 といまの位のこくろ 林の風 翁
 素まといのぼるもけりり 信化

飛

ノこくくくと度すぬ水よ去の風 翁
 ウもくくと桐のをまざる水所

長

川然いりけとおをえきさうい 仲志
 川一ウあちくあちく出代て 旧楓
 谷水の定ませうれて花筏 里若

董

ヲ刃六の帳をえり去るし 翁
 身よみて甘まかいに得りり

産

担取る。董宿業の成る 子那
 丹はくさるまのこ考細部イ

日

ノナクさるるこれいひりりりト 太夫
 ニニくおるい出るも是持ヤ 杉風

山

ノさく波の三千坊も夕午すし 凍ト
 毛あきい山の相高の九折 柳白

ひ

ヲウのぼりつとくくと鳴やむ 正秀
 ひまうあくやまをえきまじし 松石

白

白を奉る

五五 系系と奉るの程とて月夜の時きは他社ま
 泣寺武の夜玄の会とい武の哀撫の席とて時大方
 宗道の本白あれ名所の花さき宗道に望むる之程い
 奉るもたあす又花を会起ふれ武の座の老今

初春 香梅も春を運るや雪の雪 依角

小春を身よりゆめぬ 咲七

白き梅より送る花 南

・ 浮生入るの曙を 子

夏 暑きよきくや着るのふあふ

白 暑きよきくや着るのふあふ

夏 二百一十 竹高き竹高き 竹

いもむおあれはまきの花の玉用ある家の花の有用

あるまよと秋よみえおさるる

△雑集老及老袖句

冬 竹の風より竹高き竹高き 菊

池やともくさのさんむ や水

・ さんむも白くさの風 ウ雪

位 科賞て分ありも月を 菊

位 秋の嵐より真荷連を 畦止

・ 白花あれや西よえも寺阿のと 喜竹

赤き衣袈裟の沖の苗代 春

花位はの素巻の影をのた女御田のあつちく

さし 梅を渡さるれ山も雪の時 百何

・ 白 月日る山乃杜の三月 春白

六三 花の余巻老の春よ白せり

育 又月や丁いはか未あつち 嵐枝

・ 白 ありぬ里も出てけり 柳

白 丁よこもり春のは未 松

夏 夏花の吹くや鳥友なるを 草

・ 白 白ゆ来て人も古葉の花を 丁杜

・ 松乃山崎も春の波ゆも 草

△主客挨拶を句

秋 西栗稗よりくもあつち葉の尾 菊

・ 白 白ゆ来て人も古葉の花を 丁杜

・ 松乃山崎も春の波ゆも 草

・ 白 白ゆ来て人も古葉の花を 丁杜

花結

あつや雪をさす凡乃言

位乃む人乃 椅子反草 呂九

之を孟の若し守花乃 浪 念是

、 希折あつるこもの菊 川水

他

孟良乃 楚叔ねむる孟乃

、 白梅たむま戸は花の若を焚く

、 よき夏流るつふの初去 高古

五九

五月の雪を果て平一も上川

、 舟に雪をつあく舟板 一葉

、 山田乃 柱を柱す村の

冬園

、 隙のや 春の比乃 羽竹

、 未士のサ折とたをる冬 梅

、 句 丁の名折を折く各 葉云

七十

、 風流の海をあくや 時を 凍葉

、 枝の弓しよおのむ乃 雪

未末

、 白やよまて 夜をさすむの若

、 白のまよ 柱と梅や子のもち

、 白のまよ 柱と梅や子のもち

中

、 塊巾とれや 暮る人や山 梅

、 白のまよ 柱と梅や子のもち

、 小松の中よ 雪をさす

八夕

、 夕をを 飾るや 雪の村の

、 いつくも 杖の 梅を 探 虫

、 白の 梅を さすむ 七の 夕を

古今

、 七海や 一字の 数を 一字の

、 白の 梅の ちを けは 伝る 八 葉

鹿池

、 丸なるを 上は 角を 冬を 終

杉君

、 雪の 為 文 おの 形の 松

、 引首 大を 旅す 飯の 竹を

笠 鹿やう来てう但の鶴やう山 其二

引上白^ノ名古やう空ては阜衣裁て 二

△立句の作^レて題の白 七及多者
青くてもあるまおと神幸 翁

白^ノ五并人うおるもむんせむ 鹿^ノ
歌の扱^レん^レ白^ノく^レ

白 日の去ささすうに雲のあそ 千角
白 連^レん加^レてる春そ久^レき 翠白

只一日白^ノ句^ノを^レ後^レ不^レ峡水似^レ来^レる^レる^レ
よも初会の後と^レ乃^レの後^レ来^レを^レあ^レる^レ

おる 風乃一日吹てを^レう^レく^レ 固友
白^ノ花^ノい^レ今^レ年^ノの^レ芝^ノう^レ 咲 枝考

、 折る^レ句^ノの 柳^ノ号 子
友衣 初^レ也^ノや^レ強^レ良^ノ出^レを^レ持^レり^レ 南木

草^ノ伴 白^ノ花^ノも^レや^レ其^ノ角^ノう^レる^レの^レ是^レる^レ時 考
若^ノの^レ老^ノの^レ作^レ其^ノ角^ノも^レは^レ曲^ノ言^ノは^レ目^ノを^レ是^レさ^レむ^レ白^ノく^レ

靴 月花や修^レ師^ノの^レ古^レ社^ノ秋^ノあ^レく 千角

引上白^ノ時^ノ人の^レ靴^ノ後^ノ其^ノも^レ花^ノん^レ 仙化
靴 兩年^ノ其^ノ草^ノ名^ノ我^ノの^レ又^レアリ

ま 雪^ノも^レも^レ弓^ノ子^ノに^レ折^レや^レ折^レり^レ ソ古
白^ノる^レ土^ノの^レ燈^ノ心^ノも^レ似^レす^レむ^レも^レ 柳角

、 大^ノ長^ノ刀^ノも 柳^ノう^レ号 子
ま 草^ノ物^ノも^レ其^ノ後^ノ其^ノ一^ノ金^ノ木^ノ神 山^ノり^レ

白^ノ他^ノ社^ノも^レ今^ノ人^ノ扁^ノ此^ノも^レ吹^レて 竹^ノ書
、 面^ノ白^ノ木^ノより^レ目^ノ白^ノ嗽^ノる 其^ノ花

白^ノ多^ノ 枯^ノく^レそ^レと^レ名^ノう^レた^レさ^レて^レ柳^ノむ 徒^ノ吾
、 自^ノ考^ノの^レ抄^ノ乃^レ白^ノだ^レく^レ品 枝^ノ东

東^ノ云^ノ 明^ノの^レ教^ノ乃^レ草^ノを^レ其^ノも^レ八^ノ幡^ノ舞 源^ノト
、 自^ノ月^ノえ^レも^レワ^レじ^レも^レ又^レも^レ柳^ノ鳥^ノ仙 浮^ノ水

、 号^ノこ^レも^レふ^レく^ノの^レき^ノ中^ノ 子
張^ノ仙 月^ノう^レア^レい^レ小^ノ海^ノ老^ノの^レ思^ノ由^ノ 千^ノ那

、 白^ノ花^ノ考^ノの^レ八^ノを^レこ^レを^レ候^レて^レ八^ノ乃^レり 花^ノ角
、 海^ノ乃^レ某^ノの^レ時^ノは^レ去^レ風 千^ノ柳

舞臺仙

歌くま及まぬけの歌

蓮二

■ 白ふくの花を葉て身花 北而

、 枝と葉とよりくさ 丁 子

コハカ仙の所内を去舞行と白せり

△本句と同他千奉句 七及多者

一橋ナるの日や門控てゆくまをき 位極

東中や月ハの清けて 信風

乙名の後 まつ時を 仙尾

其命十名よりて散きよあれ伏見草 百花

△むの枝りふや祇園のお目見え 几峯

草の祥よ草火をさき 嵐吉

考却 ア吹返す揚子の原や歌の久 三惟

全たかてさつと所さる花角力 ぬ回

されも乃たい又西と初け 天雲

竹萩 ア幻の中をさくや竹の林 千栢

依角牌 すてて虫さきま 冠那

自分の傍の花よ尋ねの花角 方心

去年のと春も丁さきくわ 砂林

冬蓄つ枯庭う米おきく花とも 岱水

雲の付く古きふふらん 杉風

夏七つも浪むの着るぬ花 依

今うの時るえの草花 依

其帯つ山度及びさき妹く個くみ 秀和

△神あ月さうをむまを 嵐吉

去れりのあをさ 舟竹

△雅奉句 七及多者

花引干時雅奉する事あり奉句の終りて皆作

方あれとも雅の愛格あれ付依りあり

あり 羽本を作てたき恋とえむ 翁

又あるまこと 舟む宮連 ソウ

市原 白粉をぬれも下地君ん 支考

役者もやうの衣りね お 去来

雅 大菊いさひき床のおあれや 雲翁

柳枝さきうてお古す 又 木角

世奉句をみておし腰におをよまらひ始りよまわさ
付る人あり候あきまは但神祇の制のおよ

冬 志す髪いさむ裁のうと川 カ号

劇 以灯くくく神祇の梅 子

印 馳走の雑煮屋子神祇 コモム

了 さらし白てお屋の梅 子

はみ尺考た名他事歌の例に足南は梅すま

まい京今園式あれとも神祇にめてたきおあれい

為のす方きて許されむ最前之候いおの飯く

□先王を続し白を用き候

キツ 白せあう二ツはわらなまこい 子

子 踏舞の句を志すよ去 杉風

只お世水両に土白あを後よ世水杖風両

吟一てカ仙一ととち一白く

初歌 白梅のちうりや今の所多 車花

はまカ仙の流

日か入おの岑此号 一

とあるを後其二たよ後折ととられい

り丁も必おおの玉あれえ 甚二

と付たり車花甚三件あれとも定人とるあよは扱

あうは二候まて又二お好あう一必相をかむるも

□春納法楽

カ仙ハミ下

春納法楽のちや女神の志を白面は作歌すた

言上の法おの志を白中よ合てこそ化るんれれ

春納法楽よヤされし之傳白お是を尋て曰まよ

女神の志を白いふあれい神は憐るや以白あ

お節の志を白神はまよは次て修後よりくゆる

原は揖するよも揖するのしとまれしとそ文

母候こそ志を白いあまはイ挨拶白も雅志

を作入るるん法度あれと神は世候ととる

あう頻は以志を白さ教とすれい修後よ

くくして神意をえういあてあめりくむ結う

あう候あるを修後の他社て候を修くむ

昔の不安定な事ありし事

正歌の句の流の線をもて仕立る句法

何の本の句もあらず句うか

三六 慈房の作の歌天とある地を花とある候句
ありし流の線を引く流して作る事神祇夜本の
ん乃之振八神祇ありし事ありし事一白二白
ありし一白ありし事ありし事ありし事神祇夜本の
流されし事ありし事ありし事ありし事一白
白流されし事ありし事ありし事ありし事
とる流されし事ありし事ありし事ありし事
流す又流すぬ自己流されぬ天然之流神祇夜
流すぬ流されし事ありし事ありし事ありし事
い白をむし流す格之その流を足すして白を流
むん流されし事ありし事ありし事ありし事
流されし事ありし事ありし事ありし事ありし事
あれし流の事ありし事ありし事ありし事ありし事

又の流の句の五音十声の通を流す事

松風の句ふか官。嘆乃官。

さあさやうま。山手流の流。

むらさき。流の流。極りて

正歌合併の時に上五字を連書しつり下を連書
もつり又上を連書して下を連書し仕立る事
ありし一白ありし事ありし事ありし事ありし事

裸も。ま。如月の流りか

本三六の存納法 流す流す流す流す流す流す
流す流す流す流す流す流す流す流す流す流す
格としてつりて

正歌の流の事ありし事ありし事ありし事ありし事

外に流ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事

流ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事

流ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事

流ありし事ありし事ありし事ありし事ありし事

時に都てその相印の程ありてあむむを
きりてあむむ古法を捨ててむす後お好の人
ひて松風のときを格とて後とてくく又は
程のむかよよとて下よとてはよう女作し

【舞】奉納を祝ふる他つゝ連声と利らる人あり連
声のし行和合をす秋歌えと通声と孤張を用ひ

▲白やよき声の大古の格は定ま他つゝ是声を用ひ
其は声只知のるすあれも其音もすむむ作し

其の用の用ありぬすはむむとては
化 何の木のむもきれぬ白も子 翁
イセ

尺 空門ぬぬある田の中のま 翁
、 文原の仮名は二倍のまありて 先

白 廻冊新寸神極の去 中人
馬花 磨玉寸鏡もほくはむ 翁
不々 石くく庭のきき暖 相茶

△ 柳は塚の女の花の名をくれ
、 柳は白を吹くつとて 翁
いさノ柳白柳 依奉納の秋意の何やい
やへ 柳は神を友とて奉 翁
上は天 高よ上女の子の供お納る 示右

白高白よ高を又いむむは 奈松
半日は原あり松上葉を四々民の供お納り
末て勢を新する体とてい依は三とて
お考す句を用ぬを又よの何も同し

三日 神もきれは向を山出さ白 支考
宮崎 考はよ舟とて友の何あり 林角
尺 ヲ社をてとてのむさう ソセン

△ ノハナして死ねる人さあくるり 松巧
白土依る恵のカ仏は魚の袖のむ 考

神風鼓
カ 加あきる幣は二倍の考むら 扇右
風を待時よあひく苗代 源十

あゝおのふんこゝして又白へ言ふとあつた
但信まじり加字を用紙の切字をいひて

▲信まじりの切字のりや佛固の波之

言出た白あゝ表なるは極長おの白短あゝ
表七のあゝ一なる白あゝくかゝる極異の
雲りいは短きまゝる表なるも印

〔書〕長白の短短短とて引上げて白のり
おの極は短きまゝるのりも極は南キと極
る極は短きまゝるのりも極は南キと極
まゝる極は短きまゝるのりも極は南キと極
まゝる極は短きまゝるのりも極は南キと極

▲神より初らまゝる極は短きまゝる
極は短きまゝるのりも極は南キと極
極は短きまゝるのりも極は南キと極
極は短きまゝるのりも極は南キと極
極は短きまゝるのりも極は南キと極

おの付よま^カ眼と目との波之七字あゝおの
おの付よま^カ眼と目との波之七字あゝおの
おの付よま^カ眼と目との波之七字あゝおの
おの付よま^カ眼と目との波之七字あゝおの
おの付よま^カ眼と目との波之七字あゝおの

人益は教も近きやすもの御
不二をおまゝのりも極は南キと極

はまにたそ白あゝ極は南キあゝと又よ

三お 万葉の只の草葉の惟く、

門のたむけのふも極は南キと極

水仙や暖きまゝるのりも極は南キと極

有。終 秋のおまゝるのりも極は南キと極

行田の解のまゝるのりも極は南キと極

短きまゝるのりも極は南キと極

又たこに白月

し、以衰より今も人ぬぬまの山に
まの月 ぬあぬの月さあぬぬぬ
神内あぬすむも使も使ぬ 甚二
九と教も 朽の 曉 リン

□ 匠者

カ仙の字

匠者匠者い坐玄方一長言き不易の句すし物
足方所友知哉匠士美士まよりてきく句あり
天下各力の系翁の追言よふもあき志の追言の
とく袖ぬぬ用も翁を結むを結るい豆抄
松風也一そと折る樹若むさあとりて一天下
果より依りてうあき志より哀之始

▲五老の教は万世の戒なり云古の和を手向むい
伝あきつさうも今ふこの集さるる匠俾懐旧
ま妙我誅の口もあもあく或い句拙筆の乃一
必存思の詞を用うそあき教おおく句之及令
出哀の詞を作るも一白仙はあつて論を述

只寂細きことせよ白のよも二句よも引上
るより一折おとえより白あり甚中神祈
釈を乃才某教を落依ぬ字余送字ホ
古式と述おもあぬを落るる作一より仙
冥途羅科地杖何責悪楚のささい怪る一
女余三人より一席より一て杖をもきき事
あつるゆい匠者のこゝ限ぬるこ

拾 女実右も和枯木の杖乃長 三折
大連尾峰 向末てあく一極の他 夕景

官声 夫一き念仏ゆゆる 昔翠

十 ちりよやをうけ一所の坊 ソウ

尺五本 五若生一仙の孫を抱一て

九 ちあ海きき云々の傍の戸を以て 翁

八 沙仍よるい本のお肘をのく之 友五

七 日夜よきちられて寝る及すし 翁

六 自信き地一骨を握る花の俣 翁

五 非尺、去き方てゆく房の一竹 兼

角 笠ちやまぬかも吉の百 菊
なぬ といねを裁すむの陸陸 糸

白花蓋尾張の云一扎折一、 葉云

枯白身 亡くを笠一陸守や枯尾卷 千角

弱ち 陸ふさめて 皆おる声 支考

茶 良風の茶を垂しらのむ 依之

法中 五世すかとの藤をせせす 乙抄

初お 土よあむ二集の本句の情ろし 十月

神 二方家のろす二殊しるる 万り

初 三多き一の仕合口ろき花の雲 云末

△尺、 陸守も中も志のふ巻矣 北玄

引首 只ちぬ状のおく二戒名 考

陸、 青天よりちくちくむのせり、 末

此書神代紙医字八不あり二下二教記さす

、 伊や浪花をまぬの端 船 杜リ

は手書 決くくみく子冬の目乃片 子サ

肉 方り掃 陽くろく 林風 千川

白又花いおのつゝも花微笑 徳子

、 交を結ておる後ろり 陰岐

、 赤浪やあけたの木葉捲 こそ

日 一おさひしきまの船を 系新

ウ中あの方いり地をう死に ソ重

白袖は今所の好むる花の枝 リン

、 赤く中二葉兼独りくろり 嵐号

、 向上仰と高のゆ本の リン

、 赤衣那の小袖尾ろきすろ 風不

名 赤衣子よのりさせておく月の間 八圭

、 白外考ぬ琴さうきむ花のあ リン

、 草葉方しき 依の交 換ル

、 風月の裏の紋をおろり 乙抄

、 智キ 赤の柳系すいすは柳を 木音

△尺 ヲ枝呈た院へる一世の夏 一

、 赤 ちろろ神のさるも迷ささ 所

、 白乃寺のまうちぬ花の下 吉

花 向所寸歌の歌や 梅花 小枝
信化 去もわすれ 依つく 他 信化
白 白さの社松をむす 樹よて 百子

のいもをまする 竹のま 林石
後 青柳をきぬ 古枝やる 日 千川

只 洞池乃 巻の 角 紐 林石
引首 凡 種より 人 なる 依うか

二 月 十 二 月 十 二 月 十 二 月 十
ま さ と 含 む 手 の 沖 立 信 示

白 ち ら む を せ づ け 花 笠 下
月 書 上 きの ぬ 紙 衣 子 許 云

小 せ の ぼ り の 草 花 ころり 中
白 又 さ ぎ ぎ の 夏 の 境 界 手

冬 著 枯 庭 へ 来 れ ぬ 巻 子 袋 水
七 日 葉 の 付 け る 古 き 小 盆 と 水

初 霜 の ち 花 を せ せ る 松 笠 依
お 初 霜 の ち 花 を せ せ る 松 笠 依

お お り の 枝 ぬ 寸 歌 去 石 葉
白 七 子 も 信 ち の 巻 子 ぬ ち 杉 風

今 の 志 くれ い え の 草 席 依
成 成 くと ち ち ち ち 七 回 け 席

れ さ い 本 の ま け 飾 て ち ち 千 川
白 老 ころり 花 又 笠 又 衣 又 巻

翁 の 追 着 上 限 て 巻 巻 中 又 巻 の 付 台 あり 門 人
只 又 巻 飾 を 忘 寸 時 時 際 て 又 寸 云 出 ち ち あり ち

信 化 追 着 水 仙 の 花 巻 子 佛 子 子 支 考
百 句 日 い き ころり と 六 七 の 巻 杖 坊

ほ ち ち 何 も ころり 門 へ 依 寸 ち ち ち ち
白 ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち

子 を 拍 て 火 燈 を 出 ち 依 ち 茶 生
冬 の 鳥 乃 夕 くれ を ち ち ち ち ち ち

白 梅 の 布 白 の 飾 ち 巻 冊 夕 市
用 乃 云 信 巻 子 巻 子 の 巻 冊 又 巻

あ の 板 す ころり 行 飾 巻 子 依 吹

夕魚 船敷の白きむしりくは 紺の
高自庵 白草の青い個々一り 幸庵

白花をよの髪に挿すと云れり
船も布や刃すの相あけき 水花

名いあゆみの初乃世火 若生
白人ともく初世凡の後乃花 仙鶴

月よ見えぬ秋目よ見えぬ
行便置ある又月の月 哀立

白何井むい白きを後よする
七定うさす るりの 齋 承

十七回 女人の侍灯深き花乃冬
キ角息 六子余日よ春居る水 後く

白む昔今又春のすけくみ 弥舎
花をうさるも席杖の音 大寺

八景 ちれと梅名にま代は吹雪く 葉巻
無住用 爰と杉葉のた飾りぬれ 佐里

△ 花と流せ油のあぬるむ 有り
ありくち社に飾る春のむ 翠風

△ 花に 移世もなきる花 浮所
七上向 加乃をれい教の 葉木

△ ウ娘いあひてゆく死うも けね
白くも手い渡すむのむくを家

△ ねをんの方の中も移る 巴抄
淫樂忌の世葉も五土をが 慈井

△ 新柔の曲突よ水き一財 ホ
△ 花 夕登も月よ志をよ氣のまを 一守

△ 白三子い昔よむの ナルし ホ
△ 名い中井よ春のゆく時 始家

△ 山嵐七風子のまを運て
名篋 ゆく中への地も空の花ゆが 和甚

△ 花も志あうくまの入ぬ 十知
白ちる花の篋こもも法の声 風草

△ 去の名跡も夜もまをく 只白

早月 泣くる空や少年の早月歌 系松
キ角世三 枝ありけいへえきくら辰 松何

白装し乃を異てりふ乃む 松樗
、 枝をうそへて杓杞異坂 千枝

この 伏や葦葉まうく云ん尾 枝尾
ヤ八俣 残る君士衣も去の去俣 笈月

自 友のまひる懐懐内 杏子
七 雪やつづく松もるの是 如風

茶烟止し去の誰衣 竹童
白更を去くふ一本千更の更のむ

百、 席たく来ふありも苔の花 三維
、 肘より、 肘さききのわ ねく

△區音は白あき何

引上白 信花けの花の力も失して 被徳
り状 風を雨して捨ふ懐のちり 海通
コ八百 初雪や枝の草際抱むむ 許云
小弓 榜よとも舟のふやあきも 系松

冬書 雪のもてんある柔と五六十 月合

夕霞 白や黄と接き去の白水うか 枝尾
白羽す 又ふや付るて雪より一青 小枝

、 残む こそ秋やんのくくむさう ま絡
、 手まうれ風の異葉仁かおさち 岷辛

、 手向とも葉の白乃ひかき 木十
、 杖尾 亡れし何極てきむ杖の風 倉庫

、 尺一毛あれも白ありれ白を畧するに教を
、 雪りの時其中こそするふくはおもほ多し

□人倫と人信(人倫)とあはるる

古語 昔の訛社も今の他社も打裁の泣乃
、 明くあふぬい姿情の二つ社分らさるるあく

▲去疑の想泣く若つと姿情伴用のあをりて
、 一方法一理の法式を定むるよその在せも亦三

、 信の在生おむむは教ありて作家ありて

古来只以世字の一人位とせぬるとんは連は五
字に教子の名教を合とるべき事とて七部の
注者も爰に人位哉とて注し自ら昔の付白と
怪めし今是を解し其部を分て注白とあり
人たる事の通を払て明らふ事也

主トハおき之とも人の係ト上ト一字之君園白納
云改め未の友名僧友名大名なり代友教
神立坊之名之何之教又帝仙何新度去宮
宮方云家方及山中云局勇振内字
後友方丈位持西事納不隠居及及法本の
君不名也又徳谷佳治亦の姓名并古人名本之
惟トハ男也と分す他之は何字之若老若僧
尼人お人扱人何人教客友仲男甚衣連同士
を付乃心字合也那あて先生者公歴ト云思
民乃姓妙奴丁雅歌時方付又許トトホ教之
身トハ自とます何字之我已某私拙トトホ自

別其は方ホ教之新法トトホ中人

独トハ人教をさす何字之一人二人每人何騎軍
多勢懸集トトホ衆生ホ教之

媒トハ懸懸と号する名何字之仙師医師画師
何師教何好候好何母教系美強美教冥取
草取教能持皆持教曲志言蘇志教大工木挽左
友不加日用法職名某打之猿得る象大長翁
法系志教トトホ呪れ乃ん持し何系後生教
官司社務社司教武士侍小性供存出代持系
代書及腰之教使我御を乞水及田亦也早
六尺教上子下子上戸ト戸云子と食稱多言
了士教大力英男何房教何妻何子教頭博
太頼持老ま教推て志取トトホ教注白多先トト
一何トトホトトホ人位トトホ何トトホトトホ

古来天皇天女帝仙何新度鬼仏トトホ教古式ニ
色々流アレ氏人位ニハ二万トトホ去ハキト

只上文より自語お連あれい支考汲巻の證をす

主 長せの終文君の君你き 小枝

印 初花の万葉ぬる時あれや 三将

柳 君代の信も持寸風の神 幸平

柳 以又二終るるんお老やぐぬ り和

柳 泉ひれい嫁もきんむをえよ来て 柳因

拾 ちるく日と石の井持る天女 法凡

拾 艶をる恋う法花よむ声 三将

友 勅よ来て六位国ユネー ソ英

印 忠の鎖よて空うりてそく 享子

印 十を共へむの腰をる益乃庭 コセム

友 抜菜一宿を分る聖人 三将

友 新友の系糸しけとやあやむ 去芳

友 木もとあすの男能くくれ 風妻

友 美尾を又せむと人の守りて 三将

友 誰子の友力をさすそ 格士

友 青也依居よせり名のうさも 風紫

友 兵ア。何といふこの相 格士

友 口てい愛よくん信下。何 三

友 ちも云も後のある指を痛く 退し

友 むろ扇風うちをの押白 葵明

友 初女よ坊席の親子抱いて 三将

友 又けちるもすまぬ信人 ヤハ

友 信友 法下の師信を返る花雪 三将

友 白扇 妻の古き扇ぬあう奈母 花フ

友 大名 あのふり袖よ吐てあき 昔仲

友 一は柄て五石信之にお大名 去来

友 文月 きせりも小指をそく手標の来て 六之

友 まり 麦杖あれそくく扇も 三将

友 西りの青の村るその月 八景

友 浪 木房の旅をよ依い新そえ 物事

友 代友 代友の杖をいふこと宣へて 支考

種_ニ 神_ノ水_ニむま_リの宮_ニ 立_止
上_ニ志_スる_一死_ムん_ル 信_風
母_ノ親_ノ刺_口あ_と志_志と_け 志

雞_ニ 車_をに_し聲_をた_りぬ_る 山_リ
る_をを_神も_名す_一 望_碑 考_及

坊_ニ 月_よの_けい_は坊_ニ 一_く 志_結

上_ニ 月_の宿_まま_に出_よ 翁_翁
折_る舟_乃底_作たり_一 香_皆

奈_ニ 度_も白_髪を_作む_ひり_一 杵_後
か_うは_勢鳴_文寸_取乃_月 考_丸

ト_レ 神_よう_祓宜_のき_いは_る 杵_凡
あ_りの_山家_あれ_とそ_ろけ_一 子_膳

張_花 布_セい_ろく_大塔_の宮_一 岷_下
山_灰う_まの_相り_口の_くく_一 志_結

カ_イ ち_まて_いま_りて_一 田_一 白_根

萱_ニ ち_のむ_様の_いう_は久_一き 杵_葉
ち_まて_いま_りて_一 田_一 白_根

豆_ニ 老_傍の_遠より_{もの} 杵_木さ_一 考_平
あ_りの_山家_あれ_とそ_ろけ_一 子_膳

松_ニ 大_工の_長さ_まの_後さ_一 甚_二
出_代も_あれ_のま_のと_をを_くれ_一 子_膳

松_ニ 日_を新_しま_る代_のあ_ねは_りて_一 考_舟
と_この_使う_はる_も 是_寸 月_一

松_ニ 名_月の_草は_後位_も 在_列傳_れ 子_膳
極_君の_際を_麦の_杖中_一 考_之

カ_イ 極_君の_際を_麦の_杖中_一 考_之

カ_イ 極_君の_際を_麦の_杖中_一 考_之

カ_イ 極_君の_際を_麦の_杖中_一 考_之

カ_イ 極_君の_際を_麦の_杖中_一 考_之

お流の澄さ重くと学連 有実

橋のふし人よ思むいなり 賀五

足の長二寸伸おもひち帯 仙芝

禪をかぬ時代うーとき 林之

汗店よたたのあふろくそ 麻通

これあき登せよ及を新 キ凡

人あまきまねおをうつきり 柳水

はよりいさむ念ふ 伯 朱弦

手うて赤晒配る大井 友 集加

きうーあふる石 姓の弓 千角

口のまよん定る 澄橋 志 傲士

あまきみけ 美神の像 葉云

白猪と萩と蒸をおり込て 如凡

後の曹子よ粒おをまふ 志号

柳貴だうう板凡ろと 侍業

白くと若寺高の白くと 扇

娘。入わり出すちの標干 二川

【巻】僧古式：人位ナラストイへ庄指合ヲクルヘキ之

▲傍い仏者のおんそ人字は教すれい時あるそふ

知く古式を拒めむとてそふト支考の法を

ひくさうい傍も時とすきを人位は教せい

空海意。是は時に存立て守ゆるれ

誰 携持のうい誰も袖ぬれて 支考

西花 白髪及そうりの花のほり 中流

又連る隣のうめう娘。いあ 一介

お乃勝のひんと尻声 イ吹

げ中へ新そも二年おりて 川

多年のいいききのそくお備 思芝

為夫の骨まもつとこの老とて 三羽

行人入し小四門の後 去来

まうり尻尻を伝す女子も 凡兆

男あき妹う半をちうて 口通

洞火桶は使身と不す 三羽

老ぬれい汁のうすの宵も 友五

ヤハ 庭の玉もる。廿。房。こ。ろ。よ。好。去。
 鳴をつくだん。持。ま。懐。つ。き。て。示。右。
 且。那。抄。の。ひろ。き。長。老。和。乃。
 長。老。何。う。て。何。持。ま。ぬ。彼。ち。子。サ。
 と。し。く。と。ある。侯。凡。の。善。杉。凡。
 美。堂。こ。お。お。り。控。ま。て。仮。松。杉。ツ。
 降。ま。を。れ。も。響。の。角。カ。丸。リ。和。
 隆。お。大。工。の。末。ま。道。後。出。芝。
 尾。ち。の。も。こ。短。尺。分。と。り。山。降。
 木。腐。の。後。乃。人。の。静。さ。友。由。
 五。ろ。や。ぬ。き。の。門。の。の。ま。う。山。リ。ン。
 子。供。ま。も。ろ。の。一。芝。居。か。る。ま。松。
 囚。人。を。取。て。休。る。お。月。取。一。夜。
 萩。さ。し。出。寸。長。り。ま。合。不。ト。
 向。付。處。と。禿。久。を。付。て。似。去。
 一。葉。滝。り。て。和。尚。の。虫。吐。沓。山。
 出。付。て。お。く。こ。の。ね。う。え。紫。柳。

ト 田を種る。付。の。雇。人。さ。し。合。つ。質。由。
 テ 匠。人。も。速。ま。さ。そ。ふ。糸。宮。ソ。フ。
 十 丸。ち。り。持。て。中。く。く。し。ま。き。孫。魚。
 一 橋、 お。の。沢。し。る。母。の。ろ。ろ。さ。木。因。
 一 橋、 殿。こ。ろ。付。人。の。使。り。め。き。ウ。
 一 橋、 一。お。の。葵。洗。う。け。し。る。翁。
 松、 ね。の。り。白。足。む。と。子。忍。心。誰。キ。角。
 松、 不。柏。子。を。お。人。の。粘。さ。ひ。り。お。
 松、 お。の。杖。と。よ。そ。よ。戸。庭。和。荊。
 初。菰、 葉。子。や。り。て。孫。こ。も。ろ。子。使。尻。群。菓。
 初。菰、 持。人。の。小。妻。い。お。を。を。あ。れ。や。十。念。
 初。菰、 枯。中。の。灯。持。し。持。月。曇。天。
 浪、 西。の。い。笠。燈。や。り。子。ま。さ。けて。風。葉。
 浪、 白。戸。燈。又。流。や。り。え。出。て。柳。士。
 シ 目。の。の。葉。の。又。え。ぬ。ふ。ろ。柳。ソ。松。
 断。人。の。良。士。と。出。合。あ。り。く。逸。正。
 一。下。草。を。い。ま。す。分。る。口。カ。

カイ印二
 三

翁

客

友

雜

庭きりよ出て表やうの止る

家のまはれわてくすく

師匠の体をまうす友を

けけくくく其まの神話

果報のつくを危所の幸

柳よきくくあの本よ

天名の林下の杖一系ち

各半 各々ちのちき

母方二歳て月のおさひ

角の丁もるき箱の中

朋のまの髪を猪あつものる

仲月こけむ傍の神務さ

六月もあろく山の為し

大串まぬぬ妹とまお

阿房あををけて去ぐい

おあの子の内文のち汲

三匹

占ホ

嵐竹

芒凡

宏翁

末伯

佳峰

乙存

藤平

若芝

泉命

藤帆

杏ふ

青松

ヤハ

逢支

リお

汎山

六行

元

傍

帛

トキ

さき

青

三

早

三

三

三

三

三

三

三

扱つまつ母のふ文の二つお 胡化

そはまの止る旅の玄を 以令

江戸と加傍の元を少合 汎沙

杖きくく力とおきく傍 号那

又るねね実彼る麻の角 ソラ

島のお伽の位ふすも月 三翁

舞殿とよおんふ草お 飛桂

往語もあん版の上を 可也

精進もを付うりよ思出 一字

せもん杖不線のお産 逢平

あまもう先へ折の落る来る 逢支

乃子の旦那の本めせ早 逢二

夕暮や何葉の度も往傍 逢三

其くくく府まふ板き火 新也

生立ちりくく掃く塵て 新

珊瑚あくくくくくく 逢中

猫の子とまよ文の虫ちし 逢中

小ぬくのくる娘ののひ井

杜草

花あつすとして旅の位ゆ

舟竹

其節

人の指取くうも一秋素

嵐雪

コキ

月夜をさすれ君の髪花

香和

夕々

奈答のるも氏乃 個

香及

シ

所まつ葉子下まどむ

靱水

負いひ子よ赤きまゝお

所香

るれ

本家のま苗やふる姓

三羽

印

おの月園なよ赤子と也す枝

享子

カキ

付ぬおの連園うき杖

コセム

晝

貸たまへも合息する君

宗啓

丁推

さかくても痛まらぬ衣

玉丸

控さく又れいちの小丁推

甚之

去るお火花の侍く考付す

一

ぬ

天下を平穀供すふえ

咫尺

吹矢筒たえてぬのふりせい

長水

鹿も結もぬ伯母の云信

水胡

身

文月

かまもさよおけい痛も独る

根二

巳

梅と巳とうるすの阪次

紅小

炭

同い中老の吐乃あくとして

枕シ

糸

歎されて又新給やう行

ヤハ

糸

よ指ふが子てををて足る

リ年

糸

手あまの独も足えぬ宙の杖

ハ

めつこ風のもやるまゝ

リ合

宵この月さうまちて旅大工

依く

カケ

新やも笠きて去れぬひち曲

飛末

お更のくこのまゝ乱るし

唯人

夜人の供も何やう唱え

山朴

救免よられて独る月

三羽

きぬくおふも同いちか子

呂丸

宿の姑乃ぬきあけけ

ソラ

我人良をちすを乞

フ取

周の親い跡次の様きう候お

仙化

子の杖よあゝ老の小使

キ角

独

初春

イヌ

報

煤

之、

仲人ノ口ノちりめんもぬふ 宇藤

十秋ノい恋とそだのち。糸 川足

町まりの名を伴連及 系推

部。今ノ時ノ早を唄けて 祀方

文月 十人ノあゝ余の泣め、 目的

令展ノお防のふ仗を給、 一 川系

牙の賣代を子ノ新白く 友五

原白を原寸畑の志を 夕葉

赤白もぬぬ根。防をむ ソノ

孤帳ノ白出寸塗防の吐。母 白狂

奈碗を添て盆ノ小茶渣 东相

橋の子ノ娘の袖をあゝ寄り 中敷

在如く。医防のふ人をえ持て 臥る

行町出う寸畑 折 田 之乃

色ざの仕合口ろき。昔の志 去来

隣。好の友をやり。る。去のる 大草

他 何好 糸小カノノる。き。つ。こ 一 掛

あやの飛そ。空ノ白出て 末

草持の被うき。あゝ姉。妹 草

古殿ノそり。と。と。と。と。 李夕

上方ノ目。把。と。や。ふ。美。好 昌天

ける。う。け。と。と。上の。娘。は。む 景文

乃日。夫。あ。あ。て。扱。合。振。出 天童

陣。好。た。る。舞。う。家。く。り 文

後。時。の。甘。房。の。角。ノ。母。乃。角 百陀

織。子。は。白。花。向。ま。と。来。る 以之

何。美。も。を。鼓。の。あ。ひ。吹。り。ん 麦士

指。ま。り。供。を。弛。ま。の。親。ん 箕由

あ。ま。あ。を。降。り。り。あ。く 葦二

糸。美。は。花。の。あ。も。の。つ。ま。り 广山

生。て。世。り。た。後。と。る。老。角。か 幸角

わ。と。吉。系。乃。情。く。く。も 虎雪

花。も。よ。ま。ぬ。出。る。花。盛。 角

力。は。あ。く。く。ぬ。の。仕。合 川年

炭 せんありと種は降るおろむ 松の

何物 種は持もより成る夕月 八

葉 長あつてお老やも母といふ念 荷丁

笠 吐よとれて石とまゝに 草平

出代よふのわ。町へあふもあや 草二

九代目のらんごまよまて杖の尻 麦士

とと皮乃娘も昔傳の神 以之

天向 医志友の噂もあまの瓦より 巴都

ま 了すまゝに女の 清らと 平

笠 履れぬ日も帰ふ入ふ事 産支

大工 扇根を先まゝに大工の事 二

二二反 表の代り 作 取 里人

樹十 鳴るく日もわん精進 二

本手 平中も木換の孫のまゝに 松齋

まじ 扇根茂のらや家々をたを 赤音

口幅 懐ろきまゝに皆掛り 翠舟

毛を二皮まゝにと畏り 紀白

炭 日用 新書よ日。扇掛や貝吹て ころ

月 月の屋々には扉の 門 木角

枕 祖又うまの火桶も為す斗之

角。カひんきの神もまゝに 松波

隠のて葉落ささる 他 何 百行

多信 酔を供ささるくおたか手信 芳水

何物 大内は井戸。燈さあす林のそれ 一相

地まゝは新ふ松乃下家 乍木

おろよ母のりより文をさし 石筆

川一ツ隔て武士入交 吏令

何よつけとも何乃盤氣 え士

ふあつをささる。幸と長おま 萩入

山脊の端のそとて子。供を 芝船

納。おの病を足てをう。 除風

三日 信ておろおを。又止ふお。琴指 林角

何物 万。事乃。寄も。う。い。う。あ。く。 木因

ヒナ 村もろも。と。大。は。長。く。 斜嵐

短

大

枯

幸

六

十

ハ

ハ

負

拍

心

吐きくは。柿のた乃面白や 以節

令おと摺の吳えい花吹て 風曲

言もをわて仕はふ献を 聖業

叱れて大悪。翁乃拍子ぬけ いち

生々や声も怪は思の子 キ角

たちししと。おのの 風曲

若き子の手はむて拍子ぬけ 横几

この部の宿をさるぬふし り雪

聖具は下籠るする漢の月 甚二

唐人うこの踊をうき 伯楓

高州は新もねてあつれホ 沾着

うら安の役は事る月の秋 急谷

思ふは是も悪くと古皮 葛

おのりよ女ぬ砂星とと 因入

月は今朝て吞り 松 杉 角

いぬる伯又は尾の標 岸尾 生郎

ハ

松

ハ

十

十

ハ

ハ

ハ

十

新入は伝て拍を荒次才 五相

片車の拍う子候連うら 涼十

葉防。急の今う夕をれ 千椽

花々の喉をれとと 柳 尺

大も尺あてあふぬ番。振 親計

後生。教。之を唐。く お松

瓜笛の書新代はお乃月 伯楓

舞うよんとそのす。聖。舞 有琴

社成て身もよあ。社。屋。屋 七色

又出て拍のはきも。あ。く 甚二

手思もよと。祖母の友き 惣

若子。初年。一日二日お。名 赤巻

髪。の。結。目。乃。あ。き。等。尺 仙化

拍を極とよる。武士め。く 及我

そこと。子。竹。原。の。神。以 巨角

後。を。き。ん。て。き。む。単 石人

あのぢ。い。と。も。角。の。海。陸。の。ま 許舟

所

甲。高は只異色ぬ是悟して 丹徒
尾もれ我士の二三人生とも 志新

夕

鳥つを昔下子と守也る 地航
陽の山乃出る日まぢのきりむく 赤お

上

付合を路上戸よて呑明し 嵐棠
きりり〜とあ〜れやう〜 山氷

海

響て和あ〜れはあ〜る〜 酒壺
下戸を悟ゆる雲は秋のきや 力う

替

子候の梅を我才またと〜り 翁
娘もぬ娘の眉う〜である ソ浮

炭

又さ〜あ〜娘より〜し〜 ヤハ
〜と〜と〜と大海もはの〜し〜 コ原

流系

梅り年へて素の髪う〜る 松俵
囚秋あく日〜盆の黄昏 才丸

コキ

エタ

改教ある種食の糧多 立山
仙道の末流来る恒の春 雪

原

〜士を〜る〜つ〜き井戸の燈 せ
月夜の髪を洗ふかむ出 許云

社

神田季よ出す 兄。才 才角
月〜る。利を靴跡の既付 フ船

枕

〜る〜山〜る〜る〜る〜る 逢水
木戸〜る〜る〜る〜る〜る 上凡

池

尾端よ〜る〜女子虎の平 斗加
葉をみく楊枝の先乃時音 仁官

任

熊妻よ舟〜る〜 後。才 村コ
〜る〜る〜る〜る〜る 万葉

子。彼亦う傳つる事を争て 翁

△人信字英件工用云哉不嫌

娘松の位より信十之教 任り

舟くそよく居乃萩のそ 亦乃

姥。略乃人を位せ我も巧 凍ト

△人信哉。仙鬼仙人教不嫌

宮前昔より同式も部教を定て子。信鬼の打哉

よ。信令入位也。信も人信の振の婦子云云

△人信哉。人信信云云。嫌況や世界冥矣

鬼天女仙人の教を争つ嫌云云。信も子乃

ときいなる人あれども古人と教部を合ふなり

人信と事古今抄云云。信も子乃

支考の付云云。嫌云云。信も子乃

さる氏 信も子乃。信も子乃。信も子乃

信 布袋云云。信も子乃。信も子乃

信 信も子乃。信も子乃。信も子乃

冬妻

お孫も果ぬ用いぬせり 如凡

訪む信乃。又日をつく 知是

李乃。子乃。信も子乃 故人

信。信も子乃。信も子乃 力弓

文珠のち。信も子乃。信も子乃 人

信。信も子乃。信も子乃 甚二

信。信も子乃。信も子乃 信也

信。信も子乃。信も子乃 信也

信。信も子乃。信も子乃 信也

信。信も子乃。信も子乃 信也

信。信も子乃。信も子乃 信也

信。信も子乃。信も子乃 信也

信。信も子乃。信も子乃 信也

信。信も子乃。信も子乃 信也

信。信も子乃。信も子乃 信也

信。信も子乃。信も子乃 信也

信。信も子乃。信も子乃 信也

信。信も子乃。信も子乃 信也

情上人の字の初をとりて書法甲の字を
用ひて下下書法甲の字をとりて

用ひて書法甲の字をとりて書法甲の字を
用ひて書法甲の字をとりて

右に於て多用あるは右の如く書法甲の
字の初をとりて書法甲の字をとりて

一人一人名ウ人信書ス多ク書法甲
一行ニ二三行アルハ上ヨリ次オス

ス人 用乃書法甲の字をとりて
ウ 用乃書法甲の字をとりて

ウ用 用乃書法甲の字をとりて
用乃書法甲の字をとりて

用 用乃書法甲の字をとりて
用乃書法甲の字をとりて

ウ 用乃書法甲の字をとりて
用乃書法甲の字をとりて

ス用ス 用乃書法甲の字をとりて
用乃書法甲の字をとりて

ウ用ス 用乃書法甲の字をとりて
用乃書法甲の字をとりて

用 用乃書法甲の字をとりて
用乃書法甲の字をとりて

用 用乃書法甲の字をとりて
用乃書法甲の字をとりて

ウ用 用乃書法甲の字をとりて
用乃書法甲の字をとりて

ス用 用乃書法甲の字をとりて
用乃書法甲の字をとりて

右一おの中人等あき白は只二白く九カ
十より多きありてさう書法甲の字を
用ひて書法甲の字をとりて

二書の新判をとりて書法甲の字を
用ひて書法甲の字をとりて

初ハ三書をとりて書法甲の字を
用ひて書法甲の字をとりて

其契殿は定式とあり被一紙とあり
又書法甲の字をとりて書法甲の字を
用ひて書法甲の字をとりて

新

△人よ一人我不嫌

新乃嘉あくる一人も 世言

修つる月の大般若名 キ角

比の毛を人却れも実いけ 藩川

唐人のかきも出代るんやら 台太

尻も結まぬを木の云傳 水胡

かまきよおらる禱も一人房 松二

△二人よ二人二去

花三人只人あめぬ目元 里冬

二人新乃 伊よく川 ウ中

△人青洲まき去

村切り役の人足信きそ 呂風

三敷をまぬす人をあ能 林新

和を身をもむ人を星よ 南木

摩人とある規の九寸五ア

△人日洲 三去 カ五五

了のしつる皆ま人 己 地以

拾

表

碇

吉

又月

浪

床

三日

抄百

中抄

白多

夕

あこゆる牛も人よりく 為

蕪まうり男よき人を足知子 丈草

花さくを振す人もあうり 去来

人の鳴る空乃月のと 文和

人ま川 龍よ 運河いあ 先之

横掃て糸田もきる人の声 聖水

采五本人うねる花をむ 嵐三

合あしうも人え 去 除風

たごい人を 駒きの声 支考

歌をうあつて人もあき 水南

きく人あうしびをさき 反止

あられて来手いあぬ老人 虎把

まらもつ子今も客人 百景

け鶴て月おを布む人通 加枝

一で出て舞おやきい縁人 百子

流交の信も我あ乃人 了岐

小袖も人のきも忍入

カイ印二

〇〇

莫命

人の旅よりく 聖なる一秋也 嵐雪
祝ふとやと人よんれても 秀和
りあそくく人天穿のまれ 雪
あのみうしあの人しりして 和
あもりのうこそ人のよの中 舟竹

△父母云々二去

杣

さし合あるり云て伯母旅 友徳
杣をまくむ乳母う狩祀 一石
母子より母乳の乳乃吾即 一扇

△子 二去

古去

奏

秋も子供は何となく 秋 不撤
推子の遠来る乃を行付て 不玉
あつらふきの子静とたり 玉文
とめて冬を居る宿を子 山り
云はてはる可難の甘子あ 秀吹
遠出る子供は乃果あまう 里白
甘子事の中より 禅門 方隆

山

去花

あつらひあつらう子甘子居 旅枕
笛吹ておろあうく子習子 表士

△非人伝名ト人名載不難

冬

風の力を竹高し似ゆるる 玉冠
流やとくゆる室のきんむ や水
あつらの色水は内庭まをて 力弓

去栗

山吹や雲云縁沙乃持衣 友白
腕を新乃 肌結ま殿 キ角
子強う断う方や杖と寄むむ

仙

雲孫ちの孫秋世来言句を 万子
そ花の吹くをえくる空夏 八景

西のりの身はむらうの月 数幸

△異人名 二去 カニ

古金

古代のお孫を必もて南白の人の付は字まを
そも白毎はあうられり其世及人の名をうしそ
例の一二句はるるなる守

△は二句はカ仙の事古人の名い人うきうらまよ

付るたよかく織をまて風芳あす作あふ之に
苦もすきさる津のうきさる

一字 宗盛の心ゆくもあふ去 似去
世のきくえ定家西行時き 孫

美人もあふすね政の事 可居
妓をちをいふみよえて二宮院

まうくの角や布帯の夕除 高川
孫一人を あふ去志の中 仙角

和洋乃あふと 弁 女
一体の状は新の身あふ 千草

最上を去し伏虎の髪 山夕
並美の初子あふ月のお心 岩翁

お教とあふささる此声 千角
あふささる下始のあふとあふれて 紫衣

あふの刀をく 麻の角 女
院中とあふす 團圓の像 角

△同伴古人名西去

冬 志す 宗祇の名を付しあ 一玉
日東乃李白の坊月をえて 重五

去 秋にあふささる 元 且葉
あふささるあふささるあふささる 中水

裁 け糸を糸と着良と二人連 千
連化もせおあふの孫平次 如晴

一七 月花を去し除さる妓と妓女 茂秋
あふささるあふささるあふささる 温衣

随 給もあふささるあふささるあふささる 夜谷
あふささるあふささるあふささる 千梅

柔 あふささるあふささるあふささる 支尾
あふささるあふささるあふささる 不玉

名 花の陰を去しあふささるあふささる 田入
あふささるあふささるあふささる

夕 夕 友石武石仙俗名 各あふ去 万一
あふささるあふささるあふささる 之川

八 信玄を去しあふささるあふささる 寸昭

一日新を造て仙境に入
仙 櫻桃漬楊や吐きつくらむ

長脚のものを今うの長尾
お白 之はうり行ある長ちり

雪は割るる雪乃 百脚
降臨 孫六吹草染の雪もふり

不立のく信の御を求
又及これ子字の長尾

一足はせ
白雲す 信のちり大納言

乃句は倍るにいはれり
△老若 面去 古若

老松をときこのくえ松のよき
や 脚を望むとたの詩道あり

老若の口も古心 老若
花梅 老若の口も古心 老若

老若の口も古心 老若
老若の口も古心 老若

老若の口も古心 老若
老若の口も古心 老若

老若の口も古心 老若
老若の口も古心 老若

老若の口も古心 老若
老若の口も古心 老若

老若の口も古心 老若
老若の口も古心 老若

老若の口も古心 老若
老若の口も古心 老若

老若の口も古心 老若
老若の口も古心 老若

老若の口も古心 老若
老若の口も古心 老若

老若の口も古心 老若
老若の口も古心 老若

老若の口も古心 老若
老若の口も古心 老若

海防独使已哉

後 おくはるる夏の涼中一庭 去来
松のあちろを運る云泉一庭 ウ七
字ありあはれと心と心と心と 孝民

△誰所獨使而去
悲つてをんは誰もきりん 衣氣
雪屋にわると誰もあんと 云之

山 山アキ 誰も風の吹く風 依化
誰のり子そあまの花乃時 支考

拾 ひとしをそそり 階の傍 ソウ
まらるゝ如ぬ獨使あゝも

年 祇性ゝ表出守運階の吐好 白ね
所去のぬんお階の地ま独 之

岳 娘ひよりを玉う 育る 竹菴
我独志てをれい 皆つすれ 杜草

分 すられは使ふちんて庭 文采
あけの使の成るこころ 何坐

夏 使るははとあれとやは而去の自往あり

山 山カク 小いりりこころ門をい 垂屋 白ね
あはれてあやふこも茶炭河

夕 山をんる窓をう我をさそくや 柳に
眠るれい我ををつめる春の月 柳河

公 新て孫る子と我翁い 月 青る
赤おもるゝ若くうさき 古井

表 遠くねもはさる 属 然人
我妻の君水ははるまを記して

△田カ 女考訓あり去
夏 男女考訓ありを白に 吳伴ね 限
星 女考訓ありと 如くおよつ 女考

女松 女松ホの吳伴而去
△やばあれも支考もキ南も 考訓去 口訓而去
の使あり 吳伴い 之の字去 勿佐之

菫 面白の持 女 の 杖 乃 扱 する 女 菫
身とて 女 菫 掃りり

カイ印

イセ

月花を養ふはさる娘と娘女 茂秋

コハ

合おきてまゝと云の甘柿町 許云

ヤハ

移川はしき女まねれ 度征

一は梅

△男。女。同。川。面。去。 又石

を柳

吉祥天女も是種乃月 菊

古捨

乃きの雪を大女一又う粘まき 竹秋

雪更

おとく云とそとね女の言笑 子香

影

お女の玉依姫は是とくや 似去

よ

小町くまの女くくくも 楚若

ムツ

あらくむ男かまよたのくむ 百衣

張若

授まよる成の通の男あり 百衣

ム

△氏。姓。種。面。去。 昔を

ム

ば必乃武仙を名あゝ馬よそ 菊

益

表。振。く。く。妙。乃。子。供。ホ 良和

限

妙。家。も。か。し。こ。仕。ま。い。は。く。成 子身

白勝

推。ま。い。田。舎。の。お。よ。ま。き。ま。い 子身

カイ印二

見

△君。容。面。去。 龍雪

鈴とを去れ 君くあ松 龍雪

君はさるく あくの笑ち 菊

身の下乃君とぬれて喜月 冬市

ばは君を向て冷火燈 雪

おのあまおるお 口 廣三

僅者乃客の海はお後 胤山

ねる客かりん授のまを振 文布

さく花よりいおあといれや 桐之

△妻。娘。親。祖。母。面。去。 口力

力不付寸 妻乃香 口力

独竿をあくるは 妻 佔力

● 鹿をいふ

鹿人より交てぬも木柵に 粟且
 七夕のよありは月も空ききて 玉ラン
 鹿市の鹿乃来ると吹種 采花
 鹿のあまも今人不馳き
 鹿の出入のむぐれは来り りお
 鹿つ鹿のぐとむとむ鹿の雲
 △鹿人なる信さふ子おま
 鹿いあれも信も鹿人 白鹿
 鹿人いむもめつとむれす 采羽
 鹿をささるる鹿の苦いやす
 鹿云くは 鹿せぬ 付 鹿
 鹿ろり出代者の鹿立て り由
 鹿妹あくく 鹿き云
 鹿の口は信さあまを鹿の 鹿ト
 鹿の七は信さあまを鹿の 鹿ト
 鹿清の才子乃鹿を信うを 鹿仙
 鹿居あふ才子比血た 鹿 鹿支

き

笠

、

、

、

、

天

△同書る句二のむ
 句
 十のふくくく 鹿守也る 中
 ナるとの鹿の代は鹿根茂る
 ハ大工鹿もくあちく出代て 鹿
 ア出代の子う鹿あちの行代交 鹿柳
 右カ鹿の信と鹿さくく 鹿カ鹿は信り 鹿鹿い
 鹿白あちく信りまきまき

△異支件鹿不極 吉三

鹿鹿力もも鹿鹿二句去は信り
 鹿鹿の鹿も鹿鹿の力も鹿鹿を鹿鹿
 及寸交者鹿鹿の信をえよ

鹿
 一鹿さきく 鹿葉の鹿 鹿鹿
 鹿鹿の二又二日用も鹿鹿 鹿鹿

鹿
 鹿鹿の信りあちく鹿鹿 鹿鹿
 鹿鹿の信りあちく鹿鹿 鹿鹿

鹿
 鹿鹿の信りあちく鹿鹿 鹿鹿
 鹿鹿の信りあちく鹿鹿 鹿鹿

カノ印二 辛

ひき 目のうちをくちやちや せげ
ひき 白のをくきせしめ じ
り車

目 ぢを祝けし目をいそむる 汗云
り由

目 用よりきぬはくくく 反村
ウ中

赤 膝れい案くさう月の入り 衣靴
ウ中

赤 ちまをぬやうぢの白も又ぬ 危フ
り半

赤 正まきくあそぬ 柘
ヤハ

赤 帽子も肩よりぬきこて 袴子
由

焦 引版のき用きる男初を 由
由

焦 肩て風きる後の出代 由
由

焦 可合万はを伸き揃ふ二 由
由

焦 俣と俣ととれも南天 秋航
由

焦 背中いさく改らちり 木白
由

焦 時よる橋の巾着使をかき 袴家
由

焦 手をひくくく様沢の尻 配刀
由

焦 夏よめと皆くさ布一 白
由

焦 個もろくや新く 代更
由

焦 △髪は髪二去
由

焦 袴は押丁むおとくひの髪 袴家
由

替 笠とれいお髪ゆるむ茶鞋を 袴
由

替 髪のをくは鏡さく あふ 袴
由

替 髪も髪もそくれ寸振方 袴
由

替 髪をきくれてあやうくある 袴
由

替 了寸の房い眺ておく作髪 夜答
由

替 △髪面去
由

替 月もたたら危時の髪を赤拵て 袴
由

種 冬 かくくいさむ裁のうと州 袴
由

種 冬 書くあうぬるの髪く 袴
由

種 冬 林袴
由

種 冬 林袴
由

種 冬 林袴
由

種 冬 林袴
由

尺乃髪白き箱のお法 示右
申ふくすれを思ぬる髪 を行
悪くくすく東風は吹する 呂丸

平活ノ用多クハ折ヲカヘテハカリモ有ヘシ
△牛口目 三去
おの刻乃質社まき西方 改取
懐きまきあきむむ林の月 凡兆
せりまの氣房車ふた牛 牛角
指引まき厚きえきまき 百り
栗ひまきまき行てうかつく 押伯
三平くおのまきたまき寸 友友
ぬきれまきまき出てまきおてい 一叱
持てまき傳ふ川舟の 船 寸席
お流傳まき大るまきまきおてい 林お

凡

新

昔

奉表

低

巳
及
お
お
お

手の隙をくり 勢る松明 口ケ
小傍のくまきにはあきする 土芳
人まきりつく像名口き 良お
喉てをれい内女の目まきまき 芳竹
勢のひまきを眉目まきまき り奇
△尻尻 後 面去

秋の夕を改 ありせり 車
花又まき局改まき 湧れ 白糸
まき乃性の出まき 尻 衣
まきハの尻まきまき 下舟 並竹
後押の志まき笑て山まき花 角
且般の後まきまき 響小舟 藩川
まき後まきこの後まき持て 三連
ありてお木まき後まきまき 昇角
まきわまきぬ日乃まきせうむまき 乙お
月のまきまき後まき 押まき 小去
△新 是 面去

更

お

お

お

句

艾禮

卷六

八
十

三

九

△ 句 三去 カノル

之句をばくも尾出高 許六

之句を付て又も小の十五取

捨るも取ら大工の句も是す 始家

聖具も月よ母まの句の付て 一字

是の句味も 和の句も 養生

なるも 和の句も 中

を合らば乃 和の句も 種写

之句も西六条の作即志 列字

お前の句之内文の句假 度之

系より之句も和の句も 廣山

空病の句の句も和の句も 之

之句の句も和の句も 之

△ 漢語 漢紙 書

漢紙の葉書の 本務坊 太盛

系言を和してやめ水漢 青峰

一歩ニツを漢紙におく 支考

付けて漢紙ぬ 彼男 胡中

△ 候 夏 五去 古今日

抜屏おろる 夏 五去 立志

必またりぬ候 和の句も 之

は葉乃 夏 候の句も 掌虎

さす 和の句の句も 之

抜刀しておられ 和の句も 和

葉えりまあるぬ 冬市

何を定て拾ぬ 方丸

まは差の句も 和の句も キ角

△ 和病 二去 一方 和キ同カマ

宜候乃 和の句も 之

やけと申して又 和の句も 之

和の句も 和の句も 之

和も病人あれ 小妻

月のあつて 和の句も 之

許さぬお 和の句も 之

お 已 あ 次 句 一 橋

病尿尿

白

根を洗つて角力^{カク}を^カ 木守
息災^{イサイ}てむ^ムる人^{ヒト}の^ノ災^{ガイ} 百仙

△[△]病^{ビョウ} 面^{オモ}去^ク

後^{ノチ}身^ミ尾^ビの^ノ病^{ビョウ}を^ヲ押^{オシ}へ^ル 廿八
只^{ただ}あ^らま^りく^は 括^ク 然^シ 子^コ

△尿尿^{ニョウニョウ}雪^{ユキ}浸^シれ^ル多^クる^ニ 面^{オモ}去^ク 百^{ヒャク}二^ニ三^{サン}

▲[▲]九^ク北^{キョウ}日^{ニチ}尿^{ニョウ}糞^{フン}の^ノ多^クも^モ中^{ナカ}き^キう^ウ 初^{ハツ}日^{ニチ}煙^{エン}へ^テす
され^レと^ト白^{シロ}匂^{ニオイ}と^トく^クも^モ二^ニ三^{サン}日^{ニチ}へ^テす

▲[▲]風^{カゼ}今^{イマ}も^モ世^セ上^{ウエ}の^ノお^お招^{サヒ}を^ヲ受^{ウケ}る^ニは^ハま^まる^ル市^シ朝^{アサ}に^ニ尿^{ニョウ}
を^ヲ為^スる^ニ人^{ヒト}も^モ洗^シつ^つせ^せあ^らう^ウ 尿^{ニョウ}傍^{ナド}は^ハ小便^{ショウベン}す^スる^ニた^タ式^{シキ}
の^ノり^りう^うて^テ糞^{フン}便^{ベン}の^ノ雪^{ユキ}浸^シれ^ルめ^メと^トし^しに^ニ林^{リン}守^シへ^テす
小便^{ショウベン}の^ノ尿^{ニョウ}尿^{ニョウ}い^いま^まあ^あの^ノり^りく^く又^{マタ}余^{ヨリ}人^{ヒト}の^ノあ^あは^はは^はく^くま^ま
て^テ尿^{ニョウ}す^スる^ニ人^{ヒト}も^モ扱^ア尻^シす^スる^ニ人^{ヒト}も^モあ^ある^ルま^まし^し

三笑

小便^{ショウベン}の^ノ月^{ツキ}利^リは^ハ空^{カラ}の^ノ後^{ノチ}立^タて 架^カ之^ノ
雪^{ユキ}浸^シれ^ルく^くと^トし^し 尿^{ニョウ}お^お 子^コ乃^ノ 甚^シ二^ニ
糞^{フン}あ^あら^らま^まて^テ子^コ尿^{ニョウ}尿^{ニョウ}る^ル り^りお
今^{イマ}も^モ小便^{ショウベン}す^スる^ニ人^{ヒト}も^モ一^{ヒト} 福^{フク}山^{サン}

三

又様

鼻

舌

難

あ^あえ^えの^ノあ^あき^きり^り服^{フク}部^ブの^ノ新^{シン} 毒^{ドク}平^{ヘイ}
又^{マタ}て^テあ^あき^きり^り小便^{ショウベン}桶^{ツク}の^ノお^お如^ニ 二
あ^あえ^え舟^{フネ}と^トし^しを^ヲ好^{コト}て^テ喚^{ワケ}ひ^ひふ
あ^あら^らま^まて^テ雪^{ユキ}浸^シれ^ルて^テあ^あら^ら 鬼^{オニ}士^シ
雪^{ユキ}浸^シれ^ルて^テし^しい^いる^ルも^モ雪^{ユキ}浸^シれ^ル 徒^タ音^{オン}
尿^{ニョウ}あ^あら^らま^まる^ル自^ジら^ラ風^{フウ}あ^あく^く電^{デン}柱^{チウ}
今^{イマ}の^ノあ^あき^きり^りは^ハせ^せの^ノ雪^{ユキ}浸^シれ^ル 呂^ロ杯^{ハイ}
尿^{ニョウ}の^ノお^おき^きり^りを^ヲす^スる^ニ 小^コ便^{ベン} 尿^{ニョウ}
尿^{ニョウ}の^ノお^おき^きり^りを^ヲす^スる^ニ 尿^{ニョウ} 尿^{ニョウ}
あ^あえ^え舟^{フネ}の^ノ白^{シロ}い^い大^{ダイ}和^ワ内^{ナイ}を^ヲ 字^ジお
運^{ウン}を^ヲ持^チて^テ せ^せん^ン小^コ便^{ベン} 素^ソ然^{ゼン}
を^ヲ世^セ尿^{ニョウ}尿^{ニョウ}の^ノ曲^{キョク}言^{ゴン}と^トし^しの^ノ作^{サク}も^モあ^あく
あ^あら^らま^まる^ルあ^あき^きり^りは^ハ好^{コト}て^テ用^{ヨウ}る^ル人^{ヒト}あ^あら^らま^まる^ル作^{サク}
尿^{ニョウ}尿^{ニョウ}あ^あく^く付^ツき^キを^ヲす^スる^ニか^かく^く決^{ケツ}て^テ用^{ヨウ}す^スる^ニあ^あら^らま^まる^ル

△[△]尿^{ニョウ}尿^{ニョウ}懐^{カク}哉^カ不^フ嫌^{ケン}

古^コ八^{ハチ}笑^{シヤウ}ま^マま^マ

尿^{ニョウ}尿^{ニョウ}の^ノ子^シあ^あれ^れは^ハ七^{シチ}情^{ジョウ}皆^ケあ^あら^らま^まる^ル又^{マタ}尿^{ニョウ}尿^{ニョウ}の^ノ
子^シあ^あら^らま^まる^ルの^ノこ^コを^ヲす^スる^ニは^ハ尿^{ニョウ}尿^{ニョウ}の^ノ子^シあ^あら^らま^まる^ル

おのづからいそがしくも表も新も婦も
乃うささくささく

印 伴さふもせき板巻にて 三羽

入山の茨は居りうき候 ソラ

初茹 救免よりれて独り月 翁

きぬくい教も印さの子 呂丸

宿の女乃ぬきおけけ ラ

をまき小袖の振子ぬし合 式之

三法原てきふを食 村コ

あふらん美し候 吾家 ト玉

田中あるわらう柳屋は比 力兮

きりし舟はく人いんそら 中水

秋候よりいそがしく候 今下

ねあうくくくく文をあら戸 今下

不世
不世

あり

カニ

冬

コヒン

壬

カニ

初茹

カニ

夏衣

カニ

夏衣

カニ

うそよのねえは恨て只度 南木
依工支する 今の出如
戸信の力乃ぬせく 支考
あらしの考工服の考を速 他御
細のあさきいほ子ぬ庵下 千中
分大さきも時へおまう 口阿
△日向迷懐 三去

カニ

カニ

依工敷を振寸 目草 翁
杖てうつたたか花上子之 翁
花取を次ぎ候 翁 翁
年の目乃表れて及ぬを新んう 一宇
替すのわらわらふん地味 未改
通角のりすよ くとん 翁 由之

カニ

カニ

合すをあらう 樽のやを 吾仲
袋はおく十二布の考 花フ
肩衣は花も咲き世を捨て 老
世衣 長せよ世乃婿きもあきき 翁

カニ

山

□吳山歌不廻 古之去

山歌よ山岩う崖巖岫峽峙云板九折岷谷崎
林下ホこけ歌名如くして歌を許す吳水也吳
林歌の歌の流ききよ

舟

舟

舟

舟

舟

星崎の星をさすもやあく舟 舟

舟舟つら舟の 何大 安行

舟舟のあられは舟を極く舟て 自笑

舟舟たも 雌造 舟

舟舟の舟をさすもやあく舟 舟

舟舟の舟をさすもやあく舟 舟

舟舟の舟をさすもやあく舟 舟

舟舟の舟をさすもやあく舟 舟

舟舟の舟をさすもやあく舟 舟

舟舟の舟をさすもやあく舟 舟

舟舟の舟をさすもやあく舟 舟

舟舟の舟をさすもやあく舟 舟

山三條

山三條 舟舟の舟をさすもやあく舟 舟

△山 之去 カニ五

支原吉抄よ山三條去そ峯の二た三ことと

山を三のさの峯も林も極も谷も三のさ七

舟の舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

舟の舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

舟の舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

舟の舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

舟の舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

舟の舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

舟の舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

舟の舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

舟の舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

舟の舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

舟の舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も舟も

カイ印二

七

辰

身

我

全

夕

山
下
カ
山

山陰秋夕の芳ぬをるの来て 桐井
芳思を山田乃杖の 勅 二川

出代は山の女を 吾合 巴号

師の山へ漢もまき杖の色 中蒙

恨のけ枯やとうりの山 凍ト

山侍のむしてうすはらう 凍ト

名やう山のあるこのなほ衣 汶東

草む時鳥も鳴すむの山 許舟

山守もまよる杖並ふとく 九鼻

一口乃枯石を山へ青の月 貞佐

山独信へ人よ五寸乃まじへ 梧枝

又してもく出る 郡山 白ね

あつとつて山も笑す 六之

怪吹涼す敷乃山風 号

所被のい光て滅るけう山 林房

月あつとつてあつとつてかう山 林房

むのさくけいを暮る山やある 行巻

草抄よみの思て月も三笠山 小枝
河を流る 山く乃高 号

△家。谷。高。面。去

法下も詠て流さる岑乃卷 昭笑

高まきと岑よ流して池のむ 东ち

思や心算て 難へ谷より 大川

谷の松空の月夜の時より 只尺

秋を涼め 谷乃 難 只尺

花を今谷中くぬき人へ人 小吉

お月風島の屏風もまきむ 小吉

島東のむんは花をやり 碧 仕美

△山歌村句

山柳乃木多りきつて風の香 菊

ふ地の板を かくる宮坊 松石

は木よりあつた岑のきく 菊

あれやうたの山を 麦乃ち 小

古武の舟辺に去あるなり非水邊の注ありて
お家平の舟も水辺のせんきあり花のうらむ
吳山道を嬉きん世のの中水おきみおれい

去 立てのらば乃舟の月くけよ 冬文

舟 昔の舟をすく 今乃乃獨 舟

舟 川舟の強よ貴を引立てて ソラ

水 橋乃とよあとも見ゆるそ月 初雪

あ 舟水 舟のうらふ杖のくれ 珠妙

舟 供養のそしきを吞てき込 ヤ水

舟 ぼくやホーや大東さうのむ

舟 人負よやく去の川きー カラ

舟 矢船控て舟の柿を捨つむ 弦石

舟 舟手舟次乃髪もたもす 之乃

舟 舟を舟次乃髪もたもす 昌房

舟 つきは舟 舟の麻五六お 舟御

舟 舟をくくある足板の指 席令

舟 舟へくる橋の玉ありんを 下角

舟 舟月の川くさきもほされす ソ後

舟 舟の仙をせり 時心 昭天

舟 舟きいかに乃 親き凡 正位

舟 舟ももそんのお舟舟便 梅光

舟 舟者美さう 今んをさう 伯楓

舟 舟のきく玉を射てたきの下 七百

舟 舟水辺 三石橋

舟 舟池の中よまのむ交々 菴文

舟 舟面白く又西るかられ子 兮

舟 舟信や舟の火行す芳徳て 若

舟 舟あてく權もきくも輝際よ 兮

舟 舟のよきを越る 舟さき 水

舟 舟あはて山よりさき 舟の月 舟

舟 舟と青又月ま 舟乃舟乃 舟

舟 舟あせきあくる 舟れ行候 舟

舟 舟あをさき 舟れむれ 舟の丸 舟

陸

君は流されあまの瀬を
明くは千原の松をうそく
流をよく舟もよふあり
流出て手おはらむはの傷

△川水 三去 多分有

夕きくくく 星川の 橋 箱

今ん故一 今川乃水 岸上

山川や橋の喰おを採すらむ 岸上

川紙のあまきれゆく林の 中水

せんらの自由を川の流り 巻耳

白川ときくくく白くむす橋

物言初巻のくくく西の川系を 更事

めつふも花を尋てう矢川 空お

短板のすきまあそを伝し り糸

草のそらくわはあの位ちきり ち更

水きぬ乃乃橋竹立止り 角

岸を流の改くけの小橋を 方丸

流 曉 集 乃 あり 水

花

五六本生木つけくくお湯 凡兆

てんちろ為ふおてあくく

君ふらのお湯も水かきり 車羽

水もききんふもりの山吹

草もあ乃乃池の 目茶 楓子

山をくく山椒も去乃水

△舟 五去 カミ 春白

百を更まき舟のきぬく 糸

障子をもぬ 君乃舟

その糸くく舟の枝さよ 西歩

はらる舟もおゆ乃 月 菴文

は日相舟のあふをすやり 相井

舟あも静よかて為月状 一庵

茨の上りあくる 川舟 东棠

ね耳くあのおの出舟ゆく 白毛

舟もあれ 何やのなき 方堅

空を川乃舟も通つ寸 是通

橋 孫 宿 莖 小文 集 夕 花

古拾

△浪 面去 昔上 古百句
只とのちる浪乃 味色危 去位
荒あれわくよきの夕浪 菊
送よ送よる 沙草花浪

一きく
百句

あつゆと浪すま乃白浪
風白小使壺工浪丁えて 杉凡
島のりき胡杉よするむの浪
又きく海うの浪の子あ貝
手拭の幸工浪也振すくむ
冷も登り寸大浪乃あ
是くのきくは信草の浪
さく波の林下も押もて 三伍
松の山ゆもあ乃波ゆも 才九
陣浪衣乃裾くもあ浪 才九
根白の海もあ乃白浪も 才九
植あくはもわくさくら浪 松西
んよきくさかち浪さす 松弓

友

次句

星月

拾

尚

コ入

自身

花行

葉川

読京

△浪 面去

かち川の浪く掬の大をわきむ 才九
お鹿焚志と虚守舟又えて 才九
浪く波る 切子おを 才九
一乃乃雪舟浪く川上り 才九
うさの油浪く為 才九
備我のゆゆひくちを路 才九
まてくまんとまき 才九
△橋 面去 才九

は橋く月夜を冬る人 才九
板橋く夕ア伯て壺通 才九
そくしてすくさ為橋の友 才九
わくさく花又使は侍る 才九
ちくさく木履の若し目の是て 才九
木芳路のちくは文もまなく 才九
△橋の腐るるる雪のた 才九
夕霞矢刻の橋乃短さよ 才九

昔 杳 雑 今 拾 宵 翁

△海浦渡 面去 貞吉

是くもふれそびけの海角 之伸

その海白子に不刃花咲て 涼十

おま白り 海く出る川 友初

よの海岬に舟とて入る 千川

月高きまはの海乃あんとく 舟

南風ある 横雪の海

あふりも霞のやも冬め坊 杳祇

神早もや 海乃吉中 衣吹

ふもふ海をまじりて位あし 杳之

海面に振もる相持てある 冬市

くつてまじり 浦の塩やた 口通

西行の像をおする海の月 宗波

候の着り 雲の音あく 衣籠

なひ人もふはて候のうき 衣籠

△池井 面去 日 乙抄

桂をそまふ 杳き他 小角

杳杳田中の井戸は水炊て 一品

汲ぬ杳井戸を毛おぼし 信風

□吳防 我不獲

是も山新水辺の紙乃泣あきま回一

衣入り替はるの きりて 杳

去え草爛る 乃乃きりる 小コン

古我坊目も新は遣りたり 嵐之

氏人の在室多き花坊より 業言

やう我むれのみまともは 如風

田とて寸あきま山の名を問て あ佐

あつてつる四葉折角の何京町 一葉

まもせよ上る 表一筆 曲水

今のふるまを足屋守橋の上 双言

杳仏の表は夕日さし 水

卒睡り菜を厨まき 葎初 支考

杖風ワ 門の居ふら 杳

天向

山川

葦

山

金

山

ヤ

也

種

也

新

又及川く度寸 乃亦 旧也

萩原へ河保くまふ車あり 百川

山も葉山子を笑ふ苗代 ソロ

日乃山維乃維を長末て 叩端

清水をまきつる柄杓の月 雨水

面白き也くう維る草の上 赤麦

風の字さききいふを山 落梧

よき家つくく高の足如 箱

橋のあり甲の板板に傳きて 力多

替の甲乃おて衣しき 凡相

首とくくくくくくくくく 示右

也中よまろく沙のあ文 每妻

也亦くくくくくくくくく 千那

横ちくくくくくくくくく 木守

田施舟渡乃女死掉列て 汝六

△也 三去 〇 奇角

つれなき也也くくくくく 奇角

松茸種くも種友のくくく 采雲

くくくくくくくくくくく 毛靴

也医の室もあれぬ社のを 柿柿

也くくくくくくくくくく 素指

以湯の毎川也へのきく京 湘和

花入の苗妻つくく吉也山 勇招

△何里里 面去

三板之りく板母あくく 園者

丸の月押家きんて何なり 壮矣

都く一り くの中乃賣 白ね

十りの山を 白虫度より 乙角

其内乃花根八りをるのく 衣靴

一甲の度妻いん ちを結 一井

可くくくくくくくくくく 長靴

鷹くく人あきかきも母くわて 半袴

款のそき 袴く古きく 尾尾

他 あり 巻 又 種 難 白

其

烏丸とくおまのりきしふ 可波

一汁つゝまふん 聖あり 若丸

まてあふまきアの一ツ家 若平

茶うぐ榴の中く 聖坊 麦林

甚ひくあるまがの古きし 可波

杉葉一房をふるまふ人 若丸

△系村 面去

吉永下 列子いぢり 抽發 谷水

おくれい小系の家も 豆下 一息

字急う系とそ 残る月のま 巴弓

老の系とちも ちらふりより 柳士

指合もかきいぬ村の名を付て 栗ル

山一を村の屏風をいじり 嵐枝

△市町 面去

市の使より まこの 用 仲志

市のある日も 店先の静まりて 有架

す掃の扱は 店より市へま 在支

拾

博おを博下の市へあつて 甚二

を宗也人きうぬ市乃 抽 抽子

秋あうらうら 市京の 昔 若

く、沙まの市鳥あく 寺角

市人の肩へ 持おく懐 子

お病と 信んまふ人 矢木の町 支考

おこつる 旧系角の 河系所 イ抽

おのりのあまも 町はきんぐ 呂杯

お作のつらふん ち何系町 架

豆粒町の 杉の生 植 二

町の 洞市の口を ちこれぬ 支

之後の 木道も ちうらぬ 性 葉太

白雪を 占ひく けちふりより

△庭 抽 面去

庭おをてに 古武のさくく 支考のまは
も面去の係あり 古武ま 庭下 抽も 七去ま ちれり
蒼のまも 艾さくま

・鹿柄田畑

け状 取戻りも打きて後の月と花 乙砂
 大屋の六具を志めて並ぶる 木良
 のうまをもちやむる月の夜 松幸
 川柳の祥を度々納めて 橋は
 るのふりさくさくふん坊 小妻
 返揚をさるる度々ひの夜 支考
 返揚にあちくさくさく一重 栗ル
 度々まひの 登りふん坊 六之
 △田畑五去 吉今日
 秋の田さうちをさるるの長引く 裁人
 田さうちをさうしてさうさき口 羽
 すーさきさき田のおつとて 〃
 田の平さうちをさるるのさうし 〃
 初秋やあちまき田のさうち 〃
 田さうちをさるる 〃
 非難人さるる人の葉畑 〃
 小畑をさるるさうちの神風 〃

桒 瓜畑の交のさうちの初月 伯根
 雲をさるる此のさうち 〃
 △田畑をさるる三去 〃
 秋のさうちをさるる大工小家 白根
 ちまきさうちをさるる田畑 〃
 △乃三去 〃
 日今さうち子供誘て去の乃 ソラ
 藤武志の乃の乃同葉畑 葉根
 土畑をさるるさうちの乃乃乃 〃
 主をさるる乃乃乃乃乃乃乃 〃
 夕のさうち乃乃乃乃乃乃乃 〃
 ト高の乃乃乃乃乃乃乃乃乃 〃
 皇杖のあちくさくさくさく乃乃乃 〃
 かん乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃乃 〃

カイ脚二

五

橋

雅

拾

去

陸

舟

△石岩砂土面去 吉良去

去の石の定り着すして 信風

石居をくり おかし一本

石壁は木城川あるた令て 才丸

田の中は耕砂する石の塚 凡

石知きて 門の百鳥 彫棠

孫かを押す石の 神鳥

石をくすす花丁の月 ソラ

石碑をわて 象厚の月 凡

殿まゝ岩木のくまきあうて 裁人

岩の石より 孫を中らりて ヤ水

岩をけちの 孫よりしき 日菜

ひくけすすく 孫お松のまえ 信化

小砂をけけし 孫のうす 孫人

土をつくきて 孫をやく 口通

陽まの令系つき土肥て 念是

□ 冥居如裁不種 古八三去

古三 ちよ居不二三去四門の居如二三去

同三 伴用の冥おそ孫の如二三去片

▲意門ま冥居不種あきる自わく 冥の古式

を屋客てあされ用うく 冥下はあく 依

居不人の位ふされ 冥中孫陽及冥屋門

恒壁築地又柳立冥半木の如く 冥居不

あは冥の如く 冥及寸冥居不を種さる 冥

巢の如く 冥表の如く 冥さる 冥

小文

ちよ

む橋

ちよ

冥は成り ちよのさきし 孫

おろの新刺刀も法をさし 益水

おろく家のくまきさるお 史邦

身さよのあをさし申居あて 為雪

夏おぬおのほとく 冥心 呂丸

古の冥をちよめさる 捨皮茨 孫

拾

ち新

尾毛のきりくきりくと
泡籠あられを水のとぎきり
夕白乃新まろく久しきよ
せいの戸を推し又明もよき
孤神まもるの目そよき

昌碧
稚如
荒人
巴兮
ソ由

秘盗

ち古

上段も言荒縁ま守を控
て凡くく空ま目のあ
極さくちま内溝の仲るり
二重底のちま隙の業
撃おれて妻の危妻いり永

牛所
千中
僧流
匠由
け柱

反遊

ち新

あのみちるまわりの橋は吐あり
二階の書のもけんふり
夫りしきりんぼやの着板
炭り守ちも九万八千新
アの今いり店を馬し

達支
り和
知角
者及
飯水

笠

ち新

あのみちるまわりの橋は吐あり
二階の書のもけんふり
夫りしきりんぼやの着板
炭り守ちも九万八千新
アの今いり店を馬し

達支
り和
知角
者及
飯水

シ

ち新

あのみちるまわりの橋は吐あり
二階の書のもけんふり
夫りしきりんぼやの着板
炭り守ちも九万八千新
アの今いり店を馬し

達支
り和
知角
者及
飯水

柳

ち新

あのみちるまわりの橋は吐あり
二階の書のもけんふり
夫りしきりんぼやの着板
炭り守ちも九万八千新
アの今いり店を馬し

有架
七百
柳光
呂杯

き

ち新

あのみちるまわりの橋は吐あり
二階の書のもけんふり
夫りしきりんぼやの着板
炭り守ちも九万八千新
アの今いり店を馬し

千梅
佐角
小漢

天

ち新

あのみちるまわりの橋は吐あり
二階の書のもけんふり
夫りしきりんぼやの着板
炭り守ちも九万八千新
アの今いり店を馬し

支水
田新
山市

反遊

ち新

あのみちるまわりの橋は吐あり
二階の書のもけんふり
夫りしきりんぼやの着板
炭り守ちも九万八千新
アの今いり店を馬し

右号
半新

反遊

ち新

あのみちるまわりの橋は吐あり
二階の書のもけんふり
夫りしきりんぼやの着板
炭り守ちも九万八千新
アの今いり店を馬し

右号
半新

茶故

草戸

二つ山つらき中を越えて一泉
さめぬやちるふり境目
糸うらわねを裁ゆふ衣
あゝとふむへきき山の中
草の戸の花よりうすふより

△茶 三去 カニ五 古八去

月出せききなさくむ内持て
香を結ぶ精阿の窟をの来て
あゝとふむへきき山の中
あゝとふむへきき山の中
黒木ふすくさる谷うけの小屋
たの意をて 仏造て
又あられて岩たよほりす
月むす屋をよめて言ふ
ふりより金の山をよふ
暁の月又をさそ 屋を
まろもろくまきぬ小借屋

あ 化 冬 冬 暮 暮

冬

浪

暮

暮

雑

翁

友

屋をとり又えて教へ白壁
冬版より一丁程ある大工を
名古屋よりもくきき屋を

△高号屋五去 古八去

けあ常の茶屋乃そ屋も二尺
餅屋のせしを添へる 川
名月より屋のわらふ不ふ
雲披をむよふのうら
青屋を候 風はあわしむ
たし窓の垂よ柳屋の月を又て
色抄やる 陽屋の三方
茶屋の扱えも人の代きり

△家考所より二去

弟とて虫に度家の口を
揮てうけし家おしり
ゆき雪の花も昔の行ふ家
飯家の不帯星より家飯

釈也ニ契すも、壁のそお 杉風

△伝説伝々棚

山伏位て 人比るこ 落楮

岩毎ニ築たむ位ひうを 岱水

流るむらむ碑の落たる 百回

△伝説伝々棚

一採入して其後、意乃月 尺お

榎をひる風の意乃月、 文柳

たぬ戸立ち格妻好 意 秀春

小便、不行ききる根柱 栄友

朋輩の中、よききる、 松村

△店棚、意乃月

去人々の仕、その店も荒果て 赤雄

娘、素店あうりの山、 壺天

たつ、その奈知、根柱の、 松文

情の、ゆる、孫の、益、 史邦

あ、拾、松、孫、夕、六、廿

戸

古ちの、事、を、ふ、め、わ、け、る、 凡、茶

娘、た、う、角、ま、と、ま、く、る、神、事、 榎、柳

△店、隣、お、ま、 丈、志

昔、た、う、花、う、店、を、結、ひ、く、 ソ、ラ

尾、た、う、又、あ、る、町、の、ま、く、壁、 波、豆

意、谷、の、隣、に、白、ま、け、一、畑、 栄、麻

何、る、中、も、む、の、隣、乃、意、う、 妻、好

△伝説伝々棚

遠、く、内、文、の、う、す、乃、孫、の、秋、 榎、本

よ、ん、お、く、隣、の、人、乃、来、う、り、て、 昨、才

△伝説伝々棚

お、ま、 伯、凡

お、ま、の、隣、の、ま、ま、お、ま、の、ろ、 伯、凡

△伝説伝々棚

お、ま、の、ろ、の、ま、ま、お、ま、の、ろ、 栗、ル

才、了、葉、草、夕

三

ふと不難いふん人そり 暴浪
ふん人そりそりそりそり 宗知

△赤岩赤根おま

雲

おまそ目と筋てよき下を衣 智久
おまそ目と筋てよき下を衣 松吹

白

中ておまそ赤根のまうり 岸六
おまそ目と筋てよき下を衣 岸六

炭

梯の奥まうり赤根のまうり 八
おまそ目と筋てよき下を衣 八

海印録二終

